

Session 1 惰性の王国

アートはどこで
道を踏み外したのか?

Session 2 46億年の孤独

壊れているのはアート?
それとも人間?

アート なんかいらさない!

パンクミュージックの音、
アーティストの叫びと涙を
また



アートの発生から消滅までを問いかける、緊張と脱力のドキュメンタリー全2部作

Session 1

祖馬千秋 (アートプロデューサー) 工藤安代 (アート&ソサイエティ研究センター代表理事) 倉本美津留 (放送作家) 北川フラム (アートディレクター) 津田大介 (ジャーナリスト) 平秀幸浩 (京都工芸繊維大学教授) 天川彩 (作家) 小林國雄 (盆栽作家) 工藤シンク (サイハテ村発起人) 本間桃世 (アラカワ+ギンズ東京事務所代表) 小室弘毅 (関西大学准教授) 大浦信行 (映画監督/美術家) 岡本有佳 (表現の不自由展実行委員) 藤野一夫 (芸術文化観光専門大学教授) 木田真理子 (バレエダンサー) 土屋日出夫 (オリエント工業社長)

Session 2

富永朝和 (蜂研究者) 太田忠 (なまはげ館解説員) 光島貴之 (アーティスト) 広瀬浩二郎 (国立民族学博物館准教授) リー智子 (アーティスト) 奥野吉晴 (探検家) 鎌田東二 (宗教学者) 小室弘毅 (関西大学准教授) 木田真理子 (バレエダンサー) ケロッピー前田 (ジャーナリスト) 大川ふみ (臨床心理士) 郡司ヘギオ幸夫 (早稲田大学教授) 人工知能美学芸術研究会 (アーティスト) 佐治晴夫 (理論物理学者) 大浦信行 (映画監督/美術家) 本間桃世 (アラカワ+ギンズ東京事務所代表) 工藤シンク (サイハテ村発起人)

監督・脚本：山岡信貴 ナレーション：町田康 影からの声：榎本野衣 エンディングテーマ「何」 SUPER JUNKY MONKEY 制作：リタビクチャル 配給協力・宣伝：プレイタイム
2021年度作品 カラー DCP 上映時間 Session1：98分 Session2：89分 映倫G ©2021 リタビクチャル 文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業 <https://art-iranaai.com>

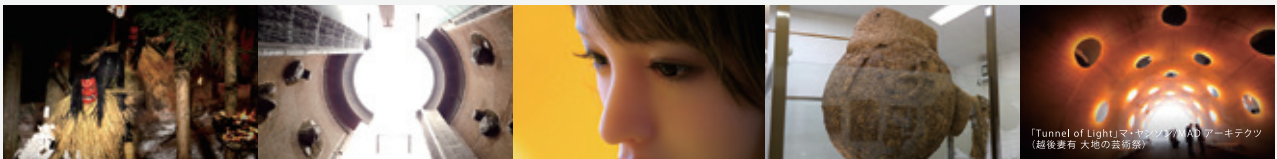


パンデミックの中、アートについて考えてみた



いま、この国のアートに何が起きているのか？

本作を監督した山岡信貴は縄文文化にハマる8年間を過ごす中、いつしか「アート不感症」に陥っていた。美術館やギャラリーでアート作品に接しても何も感じない。何を面白いと思っていたのかすらわからない状態。これは一体どういうことなのか？ そんな中、全世界的なパンデミックが始まり、日本全国で不要不急が叫ばれ、美術館をはじめとするアートの現場の閉鎖が相次ぐと、アートの存在意義についてさまざまな意見が飛び交い、時にはアート不要論も叫ばれるようになる。そんな世間の流れとシンクロしつつ、アート関係者30名以上への取材を行い、日本人にとってアートとは何なのかについて考察する旅が始まった。



Session 1 情性の王国

「日本で起っているアートをめぐる
いくつかの出来事と、世界的な日本人
アーティストがアートを捨てた理由」

「越後妻有 大地の芸術祭」はなぜ世界有数の芸術祭となったのか？「あいちトリエンナーレ2019」で見えてくる日本におけるアートの現状は？また、パンデミックの中、ドイツでは「アートは生命の維持に必要不可欠」と言われているとの報道に、色めき立つ日本のアート関係者も多かったが、それは果たして日本でも同じだと言えるのか？
これらの出来事と並行して、20世紀アートの頂点と言われるマルセル・デュシャンの「泉」（小便器にサインしただけのレディメイド）とは何だったのかを見つめ直しつつ、デュシャンとの親交も深く、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で日本人初の個展を開くに至った荒川修作がなぜアートを完全に捨てるに至ったのかを検証し、アートの限界を見極めていく。

Session 2 46億年の孤独

「残すべきアートなどあるのか？
あるとしたら果たしてそれは
アートと呼べるものなのか？」

アートに限界があるならそれはどこから生まれ、それをどのように超えることができるのかを探る旅。アートセラピーにおける絵画の役割にはじまり、過激な身体改造によって回復される人間性やハチと話をしながら共同で奇妙な造形物を創りつづける蜂研究者、さらには自意識を持った人工知能が作るアートの可能性など、アートからはこぼれ落ちてしまった「いる」「いない」を超えたものたちが作り出す未知の世界。これは失われてしまった別のアート史か？あるいはアートを破壊してしまうものなのか？
ラスコーの洞窟壁画以来、アートが本来持っていた“わかりえない他者とのコミュニケーションツール”という本質と見つめ合うことは、20万年の人間の歴史の再起動を意味することになるのかもしれない。

